高等学校のキャリア教育の 目指す方向性とは

秋田県立大学
総合科学教育研究センター 准教授

渡部昌平

キャリア教育への期待とその背景

国立教育政策研究所「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」および「第二次報告書」によれば、高等学校ではキャリア教育の全体計画が7割、年間指導計画が8割で作成されており、「計画的な実践の定着が進んでいる」とされる。一方で

キャリア教育に関する校内研修に参加したことがない担当が約5割もいるなどの課題が指摘されている。また就業体験・社会人講話などの体験的学習の実施は、職業に関する専門学科では95・9%なのに対し、総合学科で81・9%、普通科では74・6%に留まり、「とりわけ普通科における体制整備や取組の充実が」必要と指摘されている。また保護者は「学ぶことや働くことの意味を考えさせる学習」を希望し、生徒は「自分の個性や適性を考える学習」を希望しているとされる。これらは何を意味するのであろうか。

一つには「普通高校におけるキャリア教育の弱さ」があるだろう。中上位の普通高校では大学等の高等教育機関への進学を目指しており「キャリア教育の優先度は低い」と考えられているのかもしれないが、大学等を卒業すれば当然に就職が待ち構えている。「何をしていいかわからない」まま大学に入学した学生は、目標のないままズル

と大学生生活を送りかねない。本来であれば「何のためにその大学に行くか」、その大学を出た後に何をするか」は、高等学校の時期にある程度は考えしておくべきことである。またもちろん進学しない学生もいる中で「高校卒業後にはどういう人生を送るか」というキャリア設計の支援を高等学校の時期に行う必要がある。

また一つには高校種に限らない進路の多様化がある。工業高校、商業高校などの専門高校は体験的学習も多く、資格取得も奨励され、就職に向けたガイダンスも盛んに行われている。しかし一方で高学歴化・グローバル化・サービス産業化に伴い、就職先も従来のような専門分野から多様化しており、従来に比べ進路指導にも苦労が多いと聞く。

さらに個々の高等学校・教員間のキャリア教育の質の二極化もあるだろう。できている学校・教員は目標のない生徒をも成長させられるかもしれないが、そうでない学校・教員に当たった目標のない生徒は「何をしたいかわからない」まま制度の境目に落ちていくかもしれない。

そうした中で普通高校に限らず専門高校でも「学ぶことや働くことの意味を考えさせてほしい」「自分の個性や適性を知りたい」と考える保護者や生徒が増えてきたのではないだろうか。

何をしたらよいか

進学校にせよ専門高校にせよ進路多様性にせよ、将来的に就職するに当たっては企業から主体性やコミュニケーション能力が求められる。志望動機を言い、自己PRするためには「自分は何がしたいのか」「そのために高等学校で何をやってきたか」が問われる。高等学校での学びや体験を、「自分のこと」として社会あるいは未来とつなげていく必要がある。

野球が上手くなりたければ基礎練習や体力づくりが必須なのと同様に、将来「目指す大人」になるためには基礎学力ほか学びや経験が欠かせない。野球における基礎練習や体力づくりは、現時点で考えれば「面倒」「嫌なこと」かもしれないが、未来から考えれば「やるべきこと」になる。「ものづくり分野に進みたい」と目標が明確になれば、数学や物理、工学が「面倒」「嫌なこと」でも「やるべきこと」と認識され、学び・行動が促進される。

すなわち、高校種に限らず普遍的に①今案をすると、未来に苦労することになることを理解させる（今と未来がつながっていることを理解させる）、②「出口としての就職」だけでなく、あつて欲しい未来（生き方や人生）を考えさせる、③あつて欲しい未来を構築するための過程として、現在の高校

生活(学び・経験)を位置づけさせる、
④今できていること・できていないことを整理して、今やるべきことを具体化させる、ということが重要である。それにより生徒たちは今現在の勉強や高校生活を「仮に面倒で嫌なことだとしても、未来のためにやらなければいけない・やるべき」と前向きに捉え、行動できるようになる。

言い換えるならば未来に向けた目標設定の支援であり、目標達成に向けた行動の支援である。PDCAの管理が自分でできるように支援する、と言ってもいいかもしれない。高校生活や人生の設計というマクロの視点で見ても然り、個別の授業や部活、職場体験など「ミクロの視点」でも目標設定と目標達成に向けた行動が大きな意味を占める。職場体験を例に取れば、「職場体験を、自分の未来設計の中でどう位置付けるか」「職場体験にどういう目標を設定して参加するか」「職場体験を振り返って、得られたものは何か。足りないものがあるとしたら、今後どうしていくか」などの目標設定・行動・成果確認・目標の再設定(PDCA)の実施である。こうしたPDCAの管理を、個々の授業や部活、課外活動を通じて、また高校生活全体を通じて慣れれば、仮に当初の目標を諦めざるを得なくなったとしても、次の目標に向けて自分でPDCAを回していけるよ

うになる。すなわち高等学校卒業後であっても、学校側の支援なしに自ら行動できるようにするのである。

「あつて欲しい未来」を考えさせる

実は「あつて欲しい未来を考える」という方法論は、近年盛んになっていくブリーフセラピーでよく用いられる方法である。その症状の原因や意味を考えるよりもまず先に「あつて欲しい未来」を考える。全国の高等学校の進路指導に影響を与えた福岡県立城南高校のドリカムプランはまさにこうしたモデルである。また城南高校に限らず企業講演会や職場体験(インターシップ)などの「外部刺激」を与えることで、生徒の未来を考えさせる取組を行っている学校は多い。こうした「外部刺激」は、参加する生徒の役割・責任意識の惹起から生徒の成長を引き起こしやすいが、一方で生徒の関与が低い、参加人数が多い等の理由で役割・責任分担が薄い場合には効果が薄くなる。生徒に対してどれだけ「自分のこととして」参加させられるか・考えさせられるかが事業実施の鍵となる。本学ではインターンシップに行く前に「その仕事(業種・職種)に対する自分の興味・関心を明確化してくる」「その仕事(業種・職種)自体に対する理解を深めてくる」という最低二つの目標を立て、事後報告としてその発表と

報告書提出を課すこととし、一定の効果を上げている。

また近年、「自分で選択できない」「自己主張ができない」生徒が増えてきている。そうした「あつて欲しい未来」がよく分らない生徒に対しては、M・L・サヴィカスを始めとする社会構成主義キャリア・カウンセリングの手法が有効だと考えている。またそのための資源として今自分に何があるか、何ができるかを考えるに当たっても、ブリーフセラピーや社会構成主義キャリア・カウンセリング、ポジティブ心理学、アドラー心理学などの手法を用いることが可能である。要はこれまでの自分の人生を振り返ってみて、自分自身の興味や価値観、能力の「小さな萌芽」を、自信のあるなし・自己評価の高低にかかわらず見つけていくことへの支援である。それは「人より優れていること」に限らず「当たり前でできていること」「ふとした日常の楽しみ」「周囲と支えあっていること」「日常生活をきちんと送れていること」などを含む。小中高で頑張ったことの振り返りは各学校校種でも行っているだろうが、その他に職業カードソートや「1日を振り返る」(日常の1日を振り返って、どんな時が楽しいか、どういう時に感情が動くかを振り返る)、「5つの人生」(仮に5つの人生を送るとしたらどんな人生を送りたいかを考え、そ

の中から最も生きてみたい人生を見つめ直す)などの質的キャリア・アセスメントを用いることが可能である。

仕事(職業)理解が進んだり就活に取り組んだり、また行動やコミュニケーションに積極性が発揮されたりするのは、まずは「自分や周囲について考える」ことを通じた自己理解(自己の興味や関心、価値観の理解)が重要である。その際の自己理解は、やりたい業種・職種の特定というよりも「車が好き」「人に喜ばれたい」「自然が好き」など「より根本にある価値観の理解」である。また生徒はややもすれば「自信がない」「失敗したくない」「リスクを取りたくない」と行動を躊躇しがちであるが、行動しないことには自信も選択も生まれない。自己理解の次のステップとして、自信をつけさせるというよりもむしろ「自信をつけるために行動する」「失敗を恐れずに行動する練習をする」ことの支援が必要であり、行動を勇気づける際にもブリーフセラピーや社会構成主義キャリア・カウンセリング、ポジティブ心理学、アドラー心理学などの手法が役立つと考えている。

わたなべしょうへい ●国際基督教大学教養学部教育学科(心理学専攻)卒業。明星大学大学院修士(心理学)。1996年労働省(当時)入省、ハローワーク札幌、職業安定局業務調整課、民間需給調整事業室、ハローワーク飯田橋、沖縄労働局等に勤務。2011年より現職。専門分野はキャリア教育、人材育成。